우리, 떠나온 자들  「私たち、流れてきた者たち」

書評、冨山一郎『流着の思想』(2015)

高秉權

この本で取り上げている「沖縄」は、私に不慣れな時空間である。私はそこを一度も行ったこともなければ、その歴史を勉強したこともない。だが、著者がその名に括弧をつけて提起した問題―この本の副題は「「沖縄問題」の系譜学」である―は不思議なことに不慣れな感じがしない。

「沖縄問題」が「沖縄の問題」だけで見えないということ。この感触がなかったら、沖縄について何も知らないまま、「沖縄問題」を語るこの短い書評を書くことはできなかっただろう。

6年くらい前だったのだろうか。沖縄の運命を越南の名を借りて朝鮮に送ったテキストを読んだことがある。それは、1905年第二次日韓協約(日韓保護条約)直後、朝鮮で翻訳された『越南亡国史』という本である。

この本はフランスによる越南の敗亡と植民地化に関する話をとりあげているが、当時日本による同じ運命を予感した朝鮮人に大きな反響をおこした。

 この本をだす前、越南人の著者潘佩珠は、日本による琉球の敗亡を扱った『琉球血涙新書』を書いたことがある。彼は琉球人がいかにして敗亡し植民地化されたかを越南人に伝えようとしたのである。

このように琉球の敗亡は越南人に目撃され、越南人の敗亡は朝鮮人に目撃された。琉球人を眺める越南人たち、越南人を眺める朝鮮人たち。同じ運命を予感したがゆえに、同情し、また、その一方では逃げだしたかった目撃者たち。

かれらに異なる歴史の夢、現実化されたこととは別の歴史の可能性はあったのだろうか。『流着の思想』を読みながら、かつてのこの問いが再び思い出された。

晩年に書いた文章でカントは、革命は目撃者たちの心から起こると述べた。言わば、フランス革命は自分のことではないにも関わらず、自分のこととして受けとめた見物人たち(フランスのことをあたかも自分の国のことであるかのように受け入れ支持した人々)が共感したある情熱から起きたということである。が、知られているように魯迅は見物人を軽蔑した。

彼は自分のこととしてあり得るのに人のことのように傍観する見物人から奴隷の形象を見た。誰が正しいか。しかし、カントなのか、それとも魯迅なのかという問いは可笑しい。

  なぜなら、出来事の瞬間、見物人には著者がよく使っている表現のように、一種の「帶電」が起こるからである。巻き込まれることと突き放すこと、固めた拳と冷汗、陰電荷と陽電荷は同じ運命を予感する目撃者たちに同時に生じる。カントのいう見物人と魯迅のいう見物人は文字通り「紙一重」であるわけだ(112頁)。

私は沖縄の人びとからかれら自身を眺めていた越南人たち、また越南人を眺めていた朝鮮人たちをみる。「沖縄」は、かれらが立っていたり予感していたりしたある場所、世界に遍在するある時空間を指す名ではなかろうか。

それは、「蘇鉄地獄」以降、故郷から離れなければならなかった沖縄人たちはもちろんのこと、いまこの瞬間においても故郷や国の喪失、すなわち植民地化された生を予感する、実感する人々の、さらに自分のくににいてさえ‘くにのない生’を生きる人々の、捨てられた、あるいは追い出された生を生きる人々の時空間ではなかろうか。

「沖縄」がそうした時空間の名であるとすれば、私たちはそれを「国境」と呼んでもいいだろう。私にとって「沖縄問題」は‘国境自体’を思考する問題(ある意味では「沖縄」は丸ごと‘国境’である)であり、‘国境における生’、著者の引用したバーバの言い方を借りるなら、「非＜故郷＝家＞の生(unhomely lives)」を考える問題としてみえる。

周知のように国境は「流れてきた」人々の時空間である。国境に「着いた」人々は「ホーム(home)」から「流れた」人々である。かれらの着は流からはじまり、かれらの定住は離脱の予感するなかでのみ成される。このような生のかたちを著者は「流着」と呼ぶ。

しかし、「国境」を考えることは容易ではない。私たちは「国境」を地図に表示された‘国家と国家の間に引かれた境界線’とよく混同してしまうからである。

国家の間に引かれた線としての国境は国家の中に存在する国境を思考させないし、なにより国境自体がひとつの時空間であるという点を考えさせない。

それはまるで生のある平面を折り入れて縫いでしまった縫合線のようなものである。従って、「国境」を考えるためには国境をひとつの「面」として、それも至る所に遍在する生の一定の時空間として「確保」しなければならない。「国境を線とは考えないでおこう。それは、新たな面になるのだ」(122頁)。

かつて韓国にたどり着いた脱北者たちが平均3~4年、長くて10年近くの時間を中国などで過ごすという報告書を読んだことがある。

脱北者にとっては、韓国に着くまでの中国が丸ごと国境であるだろう。(しかも、かれらの大部分は国境を越えた後でも、いわば韓国にきたとしても、依然として国境においての生を生きていく)。同じくある未登録移住者には韓国がまるごと国境である。

  このように考えてみると国境は事実上すべての領土で、すべての時間において存在するといえよう。すなわち、すべての領土はいつでも国境になるわけである。

また国境は「領土の外」であるが、「領土(territory)」が法的概念である限りにおいて、「法の外」、つまり治外法権(extraterritorial)地帯でもある。だと言って国境が国家の何の権力も及ばない自由地帯だという意味ではない。

むしろ、話はその逆である。法の効力が停止された戒厳状況がそうであるように、ここでは国家権力の超法的尋問が行われる。いつどこでも自分が誰であるかを尋問されうる場所、そこが国境である。ここで身体たちは、帯電された粒子になる。

軍人の制服を見るだけで筋肉は緊張し、額には汗がにじむ。身体は何かしらを知っているのに違いない。緊張した筋肉は身体の知であり、身体の言葉である。それは、概念以前に起こる情動(affect)の揺れであり(言葉以前の言葉)、精神の思惟以前に生じる身体の思惟であり(思惟以前の思惟)、身体が運動する以前に身体のなかで起きる運動である(運動以前の運動)。

『流着の思想』では、このような「言葉の以前の言葉」、「思惟以前の思惟」、「運動以前の運動」、「知以前の知」を確保しようとする意志が感じられる。本来西洋語での「動詞(verb)」は「言葉(ラテン語, verbum)」を意味する。

しかし、私は、この本で声化しようとするのは、単に「言葉＝動詞」ではないと考える。著者は自身の文章に「動詞」を概念化したことが多いと述べているが、私はそのようにして確保しようとする言葉自体が「副詞(adverb)」であるような感触を受けた。それは「言葉に纏わりついた言葉(ad-verb)」である。より厳密にいえば、このような印象を受けたのは、言葉がそこに纏わりついたそのような言葉(「言葉の存在論的身体性」)であるからだ。

沖縄人たち、言いかえれば、「私たち、故郷を流れてきた者たち」、「我が、国から離れてきた者たち」が植民地化された生を予定された運命として受け入れるしかないときでさえ、その身体は、依然として、闘いは未だ終っていないと語っている。

 ある違和感を表出しつつ、身体は絶えずここが「故郷ではな」いと語る。身体のかかる言葉はニーチェが「到来する」哲学者の言葉として考えた「もしかしたら(vielleicht)」という副詞、「根拠の根拠なさ」を疑う不穏な仮定と予感をあらわす副詞を想起させる。

 現在とは異なる歴史の可能性を予め排除するある不可能性の前で、疑いと問いの場所を確保することは重要である。この場所が抵抗と覚醒、政治と思惟の場所であるからであり、またこの場所が未来を差し戻すこと、未来へ帰郷することを可能にするからである。まさにここが沖縄だ。私はそういうふうに読んだ。

訳・文責　鄭柚鎮二次訳・共同作業　古波蔵契